

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 23 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21700828

研究課題名（和文） 授業内における教師の身体行動を手がかりとした
授業マネージメントの検討研究課題名（英文） Study of class management based on physical activities
of teacher in class

研究代表者

岸 俊行 (Kishi Toshiyuki)

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：10454084

研究成果の概要（和文）：本研究では、授業内の教師の身体活動が授業のマネージメントにどのような影響を及ぼしているのか、また、それらが子どもの学習環境を整えるという意味において、有効な機能を有しているのかを明らかにした。検討の結果、教師の授業内での子どもとの関わりにより、授業進行が円滑になったり、クラスが荒れる一因になったりするということが明らかになった。また、その方略は教師の力量のみならず授業時間等の制約に起因することも明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study aimed how physical activities of teacher in class have an impact for class management and how they prove useful in terms of maintenance of learning environment of children. We revealed that teacher's engagement with children in class improve the class management or kick up classroom chaos. And how to engagement with children was caused by not only the teacher's ability but also constrained class environment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育工学

キーワード：教師の身体行動、授業マネージメント、学級の荒れ、授業研究

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の教育現場においては、学級崩壊や不登校などに代表される教育問題の深刻化が指摘されていた。その中でも、特に授業中に席を立つ、私語を行う等の授業が円滑に進行されない授業崩壊といった問題は、学校教育の根幹をなす問題であると同時に、人間形成の途上にある子どもにとっても非

常に影響の大きい問題であるといえる。このような問題の広がり懸念されている中で、問題解決に向けてしなければならないこととして、教師が授業の場において、どのように子どもと相互交渉を行い、授業運営を行っているのかを明らかにしていく必要があった。具体的に考えるならば、教師の授業中の行動を子細に検討する研究が必要であると

いえる。教師は授業時間中、本時の教育目標に合った教授活動のみの伝達を児童に行っているわけではない。たとえば、雑談を行ったり、注意したり、また沈黙したりといった言語的コミュニケーションや、うなずいたり児童の反応に対して様々に表情を変化させたり、時には机間巡視を行うなどの非言語的コミュニケーションを交えながら授業を進行させている。これらの教師の行動は、授業を進行・維持させるためのマネジメント行動と考えられる。しかし、研究開始当初の教育学及び教育心理学といった領域の研究において、これら教師のマネジメント行動を研究主眼に置いた研究は殆どなされていなかった。その理由として、長い間行われている授業研究の中心的な関心が、「教師の教授方略・子どもの学習過程」にあったからだといえる。そのような点を考慮して、現在、授業崩壊等の事例が多数報告されるようになってきている現在においては、その研究主眼を授業内における教師のマネジメント行動にシフトしていく必要があった。初等教育における授業は、子どもにとって、ただ、知識獲得のみを目的としたものではなく、日常生活の大部分を過ごしている場であり、子どもの社会性獲得の場であると捉えることが出来る。換言すれば、授業は教師の立場に立てば、仕事としての場（日常生活とは別の場）であると考えられるが、子どもの立場に立てば、日常生活の1場面であるといえる。つまり、授業という場を“人”と“人”が交流することによって創り出される“生活の場”として考えるということである。その“生活の場”をコントロールしているのが教師であり、そこで活動しているのが子どもであるという視点に立つことが非常に重要になってくるといえる。

上記のような研究開始当初の教育現場を取り巻く現状を背景として、本研究においては、授業時間内の教師の授業マネジメントの詳細な検討を行うに至った。

2. 研究の目的

先述した教育現場における諸問題を背景として、本研究では以下のように目的を定めた。小学校の授業における教師の身体活動に焦点を絞り、その授業内の教師の身体活動が授業のマネジメントにどのような影響を及ぼしているのか、また、その教師の身体活動が子どもの学習環境を整えるという意味において、有効な機能を有しているのかについて実証的に明らかにすることを目的とした。

教師の授業内における授業マネジメント方略を検証するため、具体的に以下の三点を明らかにしていくようにした。

(1) 授業中に教師はどのような身体活動を

行っているのかを明らかにすることである。実際の授業は、多数の子どもの反応によって進められる。当然、それに対応する教師の身体行動も子どもの反応によって異なってくる。そこでまず、実際に教師は授業内でどのような身体活動を行っているのかを具体的に明らかにすることが求められる。

(2) 授業の進行と身体活動との関連を明らかにすることである。授業はいつも教師の思い通りに進行しているわけではない。子どもの反応により授業の進行が滞ることもある。そのようなとき、教師は表情を変えたり、身振りを交えたり、さらには机間巡視を行うことで授業の進行を図ることが予想される。そこで、教師のそれらの身体活動が、どのような授業の状態の時に出現し、その結果、授業がどのように変化していくのかを明らかにすることが求められる。

(3) 実際に行われている授業を基に、どのような教師の行動が授業の雰囲気と授業の進行、また子どもたちの授業態度と関連し、それが結果として、授業の雰囲気にどう影響するのかを明らかにしていく。具体的には、ごく問題のないとされている授業と“荒れている”と報告を受けている授業それぞれの授業において、授業記録を採取し、それらを基にした質的研究法を用いることで、明らかにしていく。

3. 研究の方法

本研究は、授業内の教師の身体活動が授業のマネジメントにどのような影響を及ぼしているのか、また、その教師の身体活動が子どもの学習環境を整えるという意味において、有効な機能を有しているのかについて実証的に明らかにすることを目的に行った。そのために、研究を以下の4つのフェーズに区切って行った。

(1) 教師の授業内における身体活動の分析
実際に校長先生より問題があると認識されている、いわゆる“荒れている”学級の教師を対象にして、その教師の授業内における身体活動の分析を行った。具体的には、荒れている学級の授業がいかに荒れているのかの検討を行った後、その授業における教師の身体行動とクラスの荒れとの関連の考察を行った。

対象；首都圏の公立小学校の2年生1学級（男子19名、女子8名）、

担任；教職歴24年の40代男性教諭

手続き；4月～12月まで連続して、当該クラスの参与観察を行った。また、データ記録用に7月および9月、12月にそれぞれ3回の授業撮影を行った。なお撮影は、教室全体が移るように前方1か所と教師の行動を追尾す

るためのカメラを後方1か所におき行った。
分析；撮影された授業をプロトコル化した後、場面展開ごとに授業を区切り、それぞれの場面における教師及び子どもの状態をコーディングした。

(2) 教師の授業内発話とクラスマネージメントの関連の分析

教師は身体行動の中でも、発話を中心とした子どもへの働きかけを行うことによって授業をマネージメントしているとされる。そこで実際の授業において教師は子どもへの働きかけを授業マネージメントという観点からとらえて、どの程度行っているのかの検討を行った。また、子どもへの働きかけを授業マネージメントという観点からとらえるならば、当然、低学年と高学年においても異なることが予想される。そこで、低学年2クラスと高学年2クラスをそれぞれ対象として、その比較を行った。

対象：首都圏の公立小学校2年生2クラス、6年生2クラスの計4クラス

対象授業：国語科の授業で、連続する4時間分、計16時間分

手続き：対象授業において映像、音声の採取を行った。映像記録は教室全体が写るように、教室の後方と前方2箇所3台のビデオカメラを設置して録画した。これらの記録から、授業中の発話を基にしたトランスクリプトを作成した。その中から「教師の発問－児童の応答－教師の評価」という一連の流れを持つ場面を抽出した。そのうち、教師の評価を言語的カテゴリにコーディングした。また、児童の応答が教師の意図していたものであるならば成功場面、教師の意図と異なるものであるならば失敗場面としてそれぞれ場面ごとに分析を行った。

(3) 実際の授業場面における教師の授業マネージメントの検討（発話による検討）

教師が授業内において、どのような発話を用いて授業マネージメントを行っているのかを明らかにするため、実際の授業場面に基にしたプロトコルを用いて、教師の発話の分析を行った。教師の授業マネージメントが問われる場面は、子どもが教師の意図した回答以外の発話をした場面であると考えられる。そこで、子どもが教師の意図した回答以外の回答をした場面（以下、予想外応答場面）を取り上げ、その際の教師の対応の検討を行った。

対象：首都圏の公立小学校1年～6年までの各学年2クラス計12クラス

対象授業：各クラス連続する5時限（1時限45分）の国語科の授業

手続き：対象授業において映像、音声の採取を行った。映像記録は教室全体が写るよう

に、教室の後方と前方2箇所に3台のビデオカメラを設置して録画した。これらの記録から、授業中の発話を基にしたトランスクリプトを作成した。その中から「教師の発問－児童の応答－教師の対応行動」から成る内容的なまとまりを1場面としてそれぞれの授業を区分し、区分された場面の中から予想外応答場面の選定を行った。次に、予想外応答場面における教師の対応行動に関して3つのカテゴリ（正のフィードバック、負のフィードバック、機械的フィードバック）を用いてコーディングを行った。

(4) 実際の授業場面における教師の授業マネージメントの検討（教師の身体行動による検討）

授業がスムーズに進行しない学級を対象に、その学級の子どもたちの授業中の行動と、それに対する教師の授業行動を授業記録を基にしたエピソード記述法によって明らかにしていく。

対象：首都圏の公立小学校2年生2クラス、6年生2クラスの計4クラス

対象授業：国語科の授業で、連続する4時間分、計16時間分

4. 研究成果

(1) 教師の授業内における身体活動の分析

“荒れている”といわれている学級に4月～12月までの間は、参与観察を行い、その中で教師の言語的行動及び身体的行動の検討を行った。教師の言語的行動の特徴として、子どもの発言及び行動に対して、「注意」する行動が少ない一方で、「無視」をする回数が多いことがあげられる。また、教師の子どもへの態度として、子どもの授業内の話題に関係のない「無関連発話」や授業そのものに対して子どもが疑義をはさむような発言・言動に対して、教師は子どもへの「否定」の態度を表すことが非常に多いということが明らかになった。このような教師の子どもに対する否定的態度の回数を時間的経緯との関連で検討すると、前期（7月）と後期（12月）では、その回数が有意に増加していることが分かる（7月の43件に対して12月は120件）が、反対に、教師の子どもへの受容的態度はほとんど変化していない（7月6件に対して12月7件）。

以上のように、対象クラスの教師は子どもの発話に対して、必要な注意をしたり、子どもの発話の内容を受け入れる態度よりも、否定・無視といった態度をとることが多く、その傾向は7月よりも12月になるにしたがって、より大きくなっていることが明らかになった。

当該クラスの状況としては、立ち歩きや授業妨害が多くみられ、前期よりも後期のほう

がその状況はより顕著であった。立ち歩き人数は7月の1授業あたりの平均が3人であったのに対し、12月の平均立ち上がり人数は32.3人であった(表1参照)。また、授業中断の平均時間は、1授業あたり7月が約256秒で12月は約287秒であった。7月と12月では中断時間の平均に大きな差は見られなかった。このことから、クラスの荒れている状況は7月よりも12月のほうがより大きいことが分かるが、それに対して、教師は淡々と授業をしていることが窺える。1授業あたりの立ち上がり人数の平均が32.3人という事実は、もはや、教室の大半で子どもが騒いでおり、円滑な授業進行が行えている状況ではないと判断できる。しかし、それに対して、教師は何らの特別な法力を持って臨んでいるのではなく、淡々と授業をこなしているという状況であり、これは子どもの授業参加態度に対しての「無視」であると考えられる。7月と12月の比較より、教師の授業内での対応のまずさの連続が授業の荒れにつながっていると示唆することが可能である。

表1 授業中の子どもの1回の立ち歩き人数と回数

立ち歩き人数	1人	2人	3人	4人	5人
7月1回	5	4			
7月2回	1				
7月3回	1				
12月1回	6	2			
12月2回	15	2	1		2
12月3回	10	8	2	6	1

(2) 教師の授業内発話とクラスマネジメントの関連の分析

一斉授業において、教師が児童の応答に対して行う言語的フィードバックの実態の検討を行った結果、言語的フィードバックはその殆どが、「結果」のみの伝達であった。確かに先行研究において、教師の様々な言語的フィードバックが児童の学習意欲に影響を及ぼしているという知見が得られているが、その様な多様な言語的フィードバックが、実際の一斉授業の場面では殆ど用いられていないことが明らかにされた(表2参照)。しかし、教師は様々な制約のある中でも、個別に対応する必要があると判断した児童に対しては、教師の主観を交えたフィードバックを行っていた。特定の児童に対するフォロー的な意味合いのある努力フィードバックは、低学年の児童に対しては、学習へのモチベーションを維持するためにも重要なことだと考えられていることが推察される。また、フィードバックの大部分を占める結果フィードバックにおいても、教師は状況に応じて、そのフィードバックの仕方を変えていることも示唆された。直接、教師が結果の正否を伝える場面もあれば、他児童にその正否を委ねるような場面もあった。これらの結果より、授業内で教師が児童へフィードバックを行

う際に、そのフィードバックの内容とともに、フィードバックの伝達方法もまた、教師の持っている教授方略の一つであると推察できる。

このように教師が授業時間という制約のある中で、結果を伝えるフィードバックに際してその伝え方を工夫しているという事実は、クラスのマネージメントに関わる問題であると考えられる。授業は、教師と子どもの相互作用の中に立ち現われてくるが、その中でも、結果を返すという行為は直接子どもの感情に影響を及ぼし、それがうまくいかない場合に、クラスの雰囲気が悪くなってしまいうということも懸念される。そのため、教師は意図的・無意図的にかかわらず、結果を返すフィードバックに際しては、その伝達方法を工夫するというようなことが推察される。

表2 学年・成功・失敗場面別、言語的フィードバック

	成功		失敗	
	2年生	6年生	2年生	6年生
結果	149(98, 51)	177(85, 92)	31(18, 13)	15(10, 5)
努力	6(4, 2)	0	0	0
能力	0	0	0	0
課題	0	0	0	0
運	0	0	0	0
感情	18(12, 6)	5(2, 3)	0	0
期待	0	0	0	0
信頼	0	0	0	0

* カッコ内は教師別の数値

(3) 実際の授業場面における教師の授業マネジメントの検討(発話による検討)

子どもの予想外応答場面において、教師は多くの場合、子どもに「確認(正誤の判定)」、「補足」、「修正(意見をまとめる)」、「同意」、「追及」することで対応していることが分かった。子どもの予想外応答を理想的な回答に近づけるために、教師は誤りを指摘して再考を求め、子どもの回答を補足・修正し、足りない言葉や表現を補う、また質問を繰り返して追求していくことで、子どもが答えを見いだす手助けをする。子どもの視点に立って、教師が子どもをしかるべき方向に導こうとすれば、このような対応行動が行われるのは、自然なことといえる。授業は教室内における子どもへの教育の場であり、子どもの学びの場であるのだから、教師は子どもの意思をうまく汲み取りながら子どもにとってプラスの働きかけをしていく事が望ましい。また、そのように子どもの応答が必ず教師によって受け入れられることは、子どもの心情的支えにもなりうるため、それが子どもの学習への意欲にもつながることが予想される。教師の働きかけによって、嫌いな授業が安心して過ごせる時間に変化し、さらに好きな授業の

中で自分が認められ、自分の力を発揮する機会を与えられることで、子どもの登校行動が促進された例も報告されている。これらの研究知見は、学習者が効果的なフィードバックを与えられたり、評価されたりすることの重要性が証明された例だろう。

また、教師は予想外応答が現出した状況によってその対応行動を変えているということが示唆された。授業は教師と子どもの相互コミュニケーションの連続によって進められるため、そのコミュニケーションは常に変化しながら繋がっている。その連鎖の途中で、子どもの思わぬ発言や行動があったり、雑談が挿入されたりと、状況は刻々と変化しており、必ずしもいつも順調に進行していくわけではない。予想外応答が現出した状況と一口に言っても、その状況は無数で、一様でないものである。子どもが予想外の行動をとった時、教師はそれに対応しなければならないし、雑談が挿入されることで授業が逸脱し、当初の予定通りに授業が進まないということもありうる。時間的余裕の無い状況での予想外応答に対しては、教師が授業の先を急ぐばかりに、子どもの予想外応答にうまく対処しきれず、負のフィードバックが行われていた。学習課題の内容とは関係ない応答への対応と、時間内に学習課題を遂行させることの必要性という、二つ選択肢の間での葛藤の中で、教師は時間内に学習課題を遂行させることを選択し、結果として負のフィードバックを行うことになってしまった。一方で、時間的余裕があり、本時の主要な学習課題を扱っている場面における予想外応答に対しては、確認や修正、追求などの正のフィードバックが多く用いられ、子どもの学習がより深められるような対応が行われていた。

以上、見てきたように、予想外応答場面における教師の対応行動の差異は、授業時間の制約やクラス構成員などの、教師の手ではどうすることもできない物理的要因に代表されるハード面と、予想外応答の内容に関わる条件であるソフト面の、二つの要因が大きいことが推察される。特に、教師にとってどうすることもできないようなハードな面を背景に持った子どもの様相外応答場面における教師の対応が、子ども個々の心理的側面に影響を与え、クラスの雰囲気や醸成する契機になることが予想できる。教師の授業内での言動は、子どもに直接影響を与える因子であり、それらが、子どもの内面に影響を与え、それがクラス中に伝播していき、クラスの荒れや授業の荒れにつながっていくということが示唆できる。

(4) 実際の授業場面における教師の授業マネジメントの検討（教師の身体行動による検討）

授業が荒れている実際の授業場面において、教師の身体行動の検討を行ったところ、いくつかの要因が同定できた。教師が注意すべきところで、有効な注意をしていない場面が多々見られた。また、教師自身も、子どもの行動に対して毅然とした対応をとって望んでいないところから、教師としての威厳の欠如というところにつながっていると見て取れる。そのような結果として、子どもは教師に畏敬の念を抱けない状況が現出してしまっているといえる。実際の事例を検討していくと、教師自身が授業に入り込んで行っているとは思えない場面が多々あった。教科書の音読や授業内容の説明を、子どもの状況を鑑みず、ただ進めているだけという印象があり、どちらかという、一歩引いているとさえ思える態度であった。

以上の分析より、荒れているクラスの教師の特徴の一部をうかがい知ることが出来た。まず、子どもの想定外の発言や行動に対して、子どもと向き合った相互交渉がほとんどみられていないということがあげられる。また、荒れているクラスのため、様々な状況の子どもたちが存在したが、子どもの状況に合わせた対応が欠如していたといえる。その結果、子どもとの親愛感の不足につながり、良好な授業運営を妨げる一因になったと考えられる。

(5) まとめ

本研究は、授業内での教師の身体行動に焦点を当て、それがクラスマネジメントという観点において、どのような意味を有しているのかを実証的に明らかにしていった。首都圏の学校4校と東北地方の学校1校の協力を得て、実際に行われている授業を参与観察、データ記録の採取を行い、更に教師のインタビューも行い、それらのデータの分析を行った。観察対象クラスには担任教師が学級経営に苦慮しているクラス、いわゆる学級崩壊しているクラスも含めた。それらの学校を、教師の授業マネジメントという観点から検討した結果、以下の3点が明らかになった。

①教師は授業内での様々な活動を時間的制約の中で行わなければならない。この時間的制約が、子どもとの多様な相互交渉を阻む要因になっている。そのため、子どもへのフィードバックは理想的なフィードバックに比べると非常に単調になる傾向がある。また、そのような要因を克服するために、教師は教師独自の方略を用いて、授業運営を行っていることが明らかとなった。

②子どもへの関わりが、否定的になってしまう要因の多くが、前述した時間的制約であることが窺える。時間的制約の中で、否定的な対応を繰り返してしまうという事例が多くあった。それを防ぐために、教師は机間巡

視等の身体的活動を盛り込みながら、子どもへのケアにあたっていることが示唆された。

③子どもへの否定的な関わりが続いてしまうと、授業（クラス）が荒れ始めることにつながってくることも示唆された。クラスが荒れ始めると、教師はそれへの対応に迫られることになり、それをすることによって、ますます授業時間がなくなっていってしまい、本時の教育目標の遂行が困難になってしまう。それを防ぐために、個別対応をするのではなく、全体に対しての注意もしくは無視という行動をとることになる。このような対応は、「個」を見るのではなく「全体」しか見ていないため、クラス全体がますます荒れてくる、というような状況をもたらしてしまう。そのような状況に一度おちいると、前期のような負のスパイラルに巻き込まれ、授業をもとの状態に戻すことが困難になると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①岸俊行、運動技能における知識と技術の関連の検討、福井大学教育地域科学部紀要、第2巻、p. 211-p. 224、2012年、査読なし
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008795258>
- ②大久保智生、澤辺潤、岸俊行、有馬道久、野嶋栄一郎、教職志望学生を対象とした異なる学級における授業雰囲気の検討、香川大学教育実践総合研究、第21号、p. 117-124、2010年、査読なし
<http://ci.nii.ac.jp/naid/40017349742>
- ③岸俊行、澤辺潤、大久保智生、野嶋栄一郎、学生・教師を対象とした異なる学級における授業雰囲気の検討、日本教育工学会論文誌、第34巻1号、p. 45-p. 54、2010年、査読あり
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007642007>
- ④岸俊行、遠隔カウンセリング時のモニタに映る自己画像と不安との関連、日本教育工学会論文誌、33巻（増刊号）、p. 93-p. 96、2009年、査読あり
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007503450>

〔学会発表〕（計5件）

- ①岸俊行、小学校における様々な取り組みと学力との関連について、北陸教育工学研究会、2011年2月12日、福井大学
- ②岸俊行、e-Learning中の学習者の学習環境および学習行動の検討、日本教育工学会、2010年9月20日、金城学院大学
- ③岸俊行、野嶋栄一郎、学級運営に苦慮するクラスの授業の特徴と教師の教授行動の検討、日本教育工学会、2009年9月20、

東京大学

- ④岸俊行、山蔦圭輔、信頼認知尺度の開発一人により信頼の捉え方はどのように変わるのかー、日本心理学会、2009年8月28日、立命館大学
- ⑤有賀亮、岸俊行、菊池英明、野嶋栄一郎、教師の発話の中で表現されたパラ言語情報とその予期される教育的効果、日本教育心理学会総会、2009年9月20、静岡大学

〔図書〕（計2件）

- ①岸俊行、岸保行、質問紙のデザインーどのように調査質問紙を作成するかー 鴨川明子編『海外調査研究の学び方』、勁草書房、p.61-74、2011年
- ②岸俊行、授業は誰のために行われているのか 大久保智生・牧郁子編『実践を振り返るための教育心理学』、ナカニシヤ出版、p.59-70、2011年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岸 俊行 (Kishi Toshiyuki)

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：10454084